大空（生徒・保護者向け）５４号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　校長通信

令和3年12月2日（木）

詩の楽しみ―詩人　吉野　弘の世界―

□本日の概要

１　詩人の吉野弘さんは、「詩の楽しみ」の中で、詩とは何かについて分かりやすく解説している。ぜひ読んで欲しい。
２　詩とは対象を個性的に褒めることである。吉野さんの詩は、さりげない日常を見つめながら、見過ごしてしまいそうな気づきや感動を取り上げ、深い洞察にまで至る優れた詩を多く残している。
３　総じて芸術は分かりにくいところがある。優れた解説を利用して、自分の感性を広げてほしい。
４　本日のＮＦＣ　感性　自他肯定力　想像力

□詩の楽しみ

１００歳の詩人柴田トヨさんを紹介した流れで、詩人を紹介したいと思います。本日紹介するのは詩人の吉野弘さん（1926―2014）です。

私は国語の先生ですが、残念なことに韻文のセンスはまったくありません。現代詩というと難解で寄りつきがたいというイメージがあったのですが、大学時代に吉野弘さんの本に出会って考えががらりと変わりました。本日紹介する「詩の楽しみ」（1982　岩波ジュニア新書）は吉野弘さんが書かれた詩についての解説書です。私はこの本に出会ったことで詩の世界に親しみを持つようになりました。この本は、高校生向けに書かれており、高校生が書いた詩、そして詩人の作品を例にして、詩とは何かを易しく解説しています。

吉野氏によると、詩とは「対象を個性的に褒めること」です。詩を構成する大切な要素は発想、イメージ、リズムの３つですが、これらをベースとしながら、個性的に表現しようという試みが詩の表現になります。

詩のきっかけは、ささやかな発見や感動です。私たちの日常は慌ただしく流れていますので、様々な思いや発見があっても、つい見過ごしてしまいがちです。吉野さんは、そんな日常を見つめながら、見過ごしてしまいそうな気づきや感動を取り上げ、深い洞察にまで至る優れた詩を多く残しています。

「I was born」は、かつては教科書に良く掲載されていました。「生まれる」ことが受動態である文法上の発見から、生まれることの意味へ少年の思いは飛躍します。散文詩という形式であり、優れた短編小説を読んだような感動が残ります。「夕焼け」「虹の足」も、あざやかな夕焼けや虹のイメージを踏まえながら、人生についての深い洞察につながっています。この詩に描かれている人々は、自分に通じると思う人も多いことでしょう。

詩だけでなく、短歌や俳句もそうですが、韻文は、可能な限り表現の無駄を省き、磨き上げられた言葉のエッセンスです。短いがゆえに、心に残るフレーズがあります。いわば感性の琴線に触れる言葉というのでしょうか、優れた詩は、思わずはっとさせられたり、詩人の感性を通じて新たなものの見方を身につけたり、感性の広がりを体験することができます。

□先達はあらまほしきものなり

どんなものでも、良いものは若干分かりにくいものです。食べ物でも、大人の味は複雑です。同様に、芸術なども、総じて分かりにくくなっています。そんなとき、優れた解説者は「難しいもの」という先入観を取り払ってくれます。逆にガイドがいないと、徒然草の第５２段の「仁和寺の法師」のように、大切なものを見落としてしまうかもしれません。兼好は「すこしのことにも先達はあらまほしきものなり」（小さなことにも、指導者は欲しいものである）という言葉を残しています。もちろん、先入観や他者の評価に囚われ過ぎるのも良くないことですが、ガイドがいないために、失敗したり、食わず嫌いでいるより、解説をうまく利用して自分の世界を広げることも一つの方法だと思います。

詩なども同じです。高校時代、私は詩など、どこがいいのか良く分かりませんでした。しかし、吉野さんという優れたガイドに出会ったことで、私は大切な世界を失わずにすみました。皆さんも、うまく解説を利用して自分の感受性を高めてみませんか。世界が違って見えてくるかもしれません。

I was born

吉野　弘

確か　英語を習い始めて間もない頃だ。

或る夏の宵。父と一緒に寺の境内を歩いてゆくと　青い夕靄の奥から浮き出るように、白い女がこちらにやってくる。物憂げに　ゆっくりと。

女は身重らしかった。父に気兼ねをしながらも僕は女の腹から眼を離さなかった。頭を下にした胎児の　柔軟なうごめきを　腹のあたりに連想し　そしてやがて　世に生まれ出ることの不思議に打たれていた。

女はゆき過ぎた。

少年の思いは飛躍しやすい。その時　僕は〈生まれる〉ということが　まさしく〈受身〉である訳を　ふと諒解した。僕は興奮して父に話しかけた。
　── やっぱり I was born なんだね ──
父は怪訝そうに僕の顔をのぞきこんだ。僕は繰り返した。
　── I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。自分の意思ではないんだね ──
その時　どんな驚きで　父は息子の言葉を聞いたか。僕の表情が単に無邪気として父の眼にうつり得たか。それを察するには　僕はまだ余りに幼かった。僕にとってこの事は文法上の単純な発見に過ぎなかったのだから。

父は無言でしばらく歩いた後　思いがけない話をした。
　── 蜉蝣という虫はね。生まれてから二、三日で死ぬんだそうだが　それなら一体何の為に世の中へ出てくるのかと　そんな事がひどく気になった頃があってね ──
僕は父を見た。父は続けた。
　── 友人にその話をしたら　或日、これが蜉蝣の雌だといって拡大鏡で見せてくれた。説明によると　口はまったく退化して食物を摂るに適しない。胃の腑を開いても入っているのは空気ばかり。見ると、その通りなんだ。ところが　卵だけは腹の中にぎっしり充満していて　ほっそりとした胸の方にまで及んでいる。それはまるで　目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが　咽喉（のど）もとまで　こみあげているように見えるのだ。つめたい　光の粒々だったね。私が友人の方を振り向いて〈卵〉というと彼も肯いて答えた。〈せつなげだね〉。そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは　── 。

父の話のそれからあとは　もう覚えていない。ただひとつ痛みのように切なく　僕の脳裡に灼きついたものがあった。
　── ほっそりとした母の　胸の方まで　息苦しくふさいでいた白い僕の肉体 ── 。

虹の足

吉野　弘

雨が上がって
雲間（かんめん）から
乾麺みたいな真直な
陽射しがたくさん地上に刺さり
行手に榛名山（はるなさん）が見えたころ
山路を登るバスの中（なかほど）で見たのだ、虹の足を。
眼下にひろがる田圃の上に
虹がそっと足を下ろしたのを！
野面にすらりと足を置いて
虹のアーチが軽やかに
すっくと空に立ったのを！
その虹の足の底に
小さな村といくつかの家が
すっぽり抱かれて染められていたのだ。
それなのに
家から飛び出して虹の足にさわろうとする人影は見えない。
ーおーい、君の家が虹の中にあるぞォ
乗客たちは頬を火照らせ
野面に立った虹の足に見とれた。
多分、あれはバスの中の僕らには見えて
村の人々には見えないのだ。
そんなこともあるのだろう
他人には見えて
自分には見えない幸福の中で
格別驚きもせず
幸福に生きていることがー。

夕焼け

吉野　弘

いつものことだが
電車は満員だった。
そして
いつものことだが
若者と娘が腰をおろし
としよりが立っていた。
うつむいていた娘が立って
としよりに席をゆずった。
そそくさととしよりが坐った。
礼も言わずにとしよりは次の駅で降りた。
娘は坐った。
別のとしよりが娘の前に
横あいから押されてきた。
娘はうつむいた。
しかし
又立って
席を
そのとしよりにゆずった。
としよりは次の駅で礼を言って降りた。
娘は坐った。
二度あることは　と言う通り
別のとしよりが娘の前に
押し出された。
可哀想に。
娘はうつむいて
そして今度は席を立たなかった。
次の駅も
次の駅も
下唇をギュッと噛んで
身体をこわばらせてーーー。
僕は電車を降りた。
固くなってうつむいて
娘はどこまで行ったろう。
やさしい心の持主は
いつでもどこでも
われにもあらず受難者となる。
何故って
やさしい心の持主は
他人のつらさを自分のつらさのように
感じるから。
やさしい心に責められながら
娘はどこまでゆけるだろう。
下唇を噛んで
つらい気持ちで
美しい夕焼けも見ないで。